

近世漢語資料における軽声表示

中村雅之

1. はじめに

現在のピンインの表記法では、声調記号を何も付さないことで軽声を表示している。このようなゼロ表記による軽声表示は、19世紀英国の外交官ウェイド (Thomas Wade) の著した『語言自邇集』(1886年第2版)に始まるようである。それ以前の軽声表示がどのようになされたか(あるいはなされなかったか)について確認するのが本稿の主眼であるが、あわせて北方漢語の特徴の一端を軽声表示という側面から探してみたい。

2. 崔世珍のハングル資料(16世紀)

軽声についての情報が得られる資料として最も古いものは、おそらく16世紀前半の崔世珍によるハングル資料であろう。すなわち『老乞大』『朴通事』という朝鮮の漢語会話テキストにハングル表記による注音と朝鮮語訳を付した、いわゆる「翻訳老乞大・朴通事」である。これらの資料の中に軽声の表示が多く見られることについては、すでに中村2006で述べたことがある。その要点は以下の通りである。

崔世珍の「翻訳老乞大・朴通事」においては、個々の漢字の下に左右二種(=左側音・右側音)のハングル注音が記されている。その双方に声調を示す「声点」(1点・2点・無点の三種)が付される¹。本稿で問題とする軽声には専用の表記はなく、「去声」と同様に「1点」で表示されている²。左側音・右側音の双方において同様である。ただし、軽声表示と

¹ 声点の表示方法は左側音と右側音で全く異なる。左側音では三種の声点で伝統的な調類を示しており、平声を「無点」、上声を「2点」、去声と入声を「1点」とする。これに対して右側音では、朝鮮語における声点の用法を援用して近似的な調値を示しており、低い声調(=上声)に対して「無点」、上昇調(=陽平声)に対して「2点」、高い声調(=陰平声・去声)に対して「1点」を付す。以上については崔世珍『四声通解』に収められた「翻訳老乞大朴通事凡例」に解説がある。

² 実際、「翻訳老乞大朴通事凡例」の「旁点」の条においても「軽声」ではなく「去声」と表現されている。上声の字が連続する場合に読み方が二通りあって、一つは上の字を平声濁音(=陽平声)に読み、もう一つは下の字が接尾辞であるか上下二字が助詞の時に下の字を去声に読む、というものである(「…若下字為虚或兩字皆語助、則下字呼為去声」)。この記述だけを見ると、この「去声」が軽声ではなく、真の去声を表現した連続変調なのではないかという疑問の生じる余地があるが、次の三点を根拠として、この箇所の「去声」が軽声を意味していると思なすことができる。

①本文の実例を見ると、本来「上声+上声」である「打了」「李子」「口裏」「(待天明)了也」の「了」「子」「裏」「也」などに「1点」(=凡例にいう「去声」)で記されたものがあるが、それらは現在軽声で読まれるものがほとんどである。(文末助詞の「也」は現在用いられない)

②これらの接尾辞や助詞は上声以外の声調に続く場合でも「1点」で記されることが少なくない。例えば

しての「1点」については、「上声+轻声」以外には「翻訳老乞大朴通事凡例」の中にもそれを示唆する記述がなく、また本文においてもその表示が徹底されている訳ではない。むしろ「們」を除けば、例外的に少数例のみ見出されるものがほとんどである。しかし、そのような「例外的な露見」が、現在でも轻声で読まれる箇所と一致するとすれば、それは「実際の言語の無意識的な反映」を示唆するものとして、一定の意味を有するであろう。以下に、いくつかの例を統計とともに示しておく。³

<左側音>

総数	状況（下線を付したものが轻声）
「們」 178	<u>1点 169例</u> 、無点 8例、2点 1例。
「了」 387	2点 360例、上声の後の <u>1点 10例</u> 、非上声の後の <u>1点 13例</u> 、無点 4例。
「裏」 391	2点 374例、上声の後の <u>1点 5例</u> 、非上声の後の <u>1点 9例</u> 、無点 3例。
「子」 359	2点 346例、上声の後の <u>1点 1例</u> 、非上声の後の <u>1点 9例</u> 、無点 3例。
「也」 166	2点 162例、上声の後の <u>1点 1例</u> 、非上声の後の <u>1点 2例</u> 、無点 1例。
「麼」 241	無点 238例、 <u>1点 2例</u> 、2点 1例。
「頭」 167	無点 159例、 <u>1点 7例</u> （うち3例は誤記） ⁴ 、2点 1例。
「見」 277	無点 274例、 <u>1点 2例</u> 、2点 1例。
「来」 384	無点 381例、 <u>1点 2例</u> 、2点 1例。
「人」 346	無点 343例、 <u>1点 3例</u> 。

<右側音>

総数	状況（下線を付したものが轻声）
「們」 178	<u>1点 174例</u> 、無点 4例。
「了」 387	無点 303例、上声の後の <u>1点 76例</u> 、非上声の後の <u>1点 8例</u> 。
「裏」 391	無点 336例、上声の後の <u>1点 55例</u> 、非上声の後の1点なし。
「子」 359	無点 306例、上声の後の <u>1点 42例</u> 、非上声の後の <u>1点 10例</u> 。2点 1例。
「也」 166	無点 120例、上声の後の <u>1点 29例</u> 、非上声の後の1点なし、 上声の前の2点 15例、上声の前の1点 1例（誤記）。
「麼」 241	2点 235例、 <u>1点 4例</u> 、無点 2例。
「頭」 167	2点 165例、 <u>1点 2例</u> 。
「見」 277	2点 270例、 <u>1点 5例</u> 、無点 2例。

「告了」（老乞大上巻 29 丁裏第 6 行）や「好些了」（同下巻 41 丁表第 7 行）における「了」の右側音など。
³ 遠藤 1984 が指摘するように、『老朴集覽』に引かれた『音義』に、助詞の「那・也・了・阿」などの字はみな軽く弱く発音し、付屬的にサッと読むだけだ（「…助語的那也了阿等字都輕輕兒微微の説、順帶過去了罷」という記述があり、当時これらの字が轻声で読まれていたことが明らかである。

³ 調査には遠藤 1990 を利用した。なお、左側音における去声と入声、そして右側音における陰平声と去声は、もともと「1点」で記されており、轻声化の資料たり得ないため、調査から除外してある。また「総数」は轻声が期待されないもの（「裏頭」の「裏」など）も含んでいる。

⁴ 「頭一道…」など轻声と見なしがたい部分に「1点」が付されたものを誤記と判断した。

「来」 384 2点 375 例、1点7 例、無点2 例。

「人」 346 2点 337 例、1点5 例、無点4 例。

「着」 366 2点 356 例、1点9 例、無点1 例。

このほかに2 例だけ見える「耳朵」についても、「朶」の右側音が「1 点」になっている。

3. ウェイドのローマ字表記 (19 世紀)

3.1. 『尋津録』(1859)

ウェイドの最初期の著作である『尋津録』では声調の表示は原則としてなされないが、「Exercises in the tones」の部分においてのみ、数字で示されている。ただし、数字はローマ字には付されずに、「加¹ chia」「行² hsing」「水³ shui」「倒⁴ tao」のように漢字の右肩に付される。この「Exercises in the tones」は15 頁にわたって139 個の文を収めるが、そこでの軽声は後の『語言自邇集』のようなゼロ表記ではなく、第1 声と同じく「1」と表記される。したがって助詞の「的」は「的¹ di」であり、複数接辞の「們」は「們¹ mên」である。ただし、軽声が予想される箇所の全てに、このような軽声表示が見られるわけではなく、助詞「了」のように本来の声調（「了³ liao」）と軽声（「了¹ liao」「了¹ la」）が混在する例も多い。⁵

安定して軽声で表示されるのは「的¹ ti」「們¹ mên」の外に「呢¹ ni（文末助詞）」「着¹ chē（動態助詞）」「麼¹ ma（疑問の文末助詞および「甚麼」などの接尾辞）」そして「耳朵」の「朶¹ to~tao」であり、本来の声調と軽声とが混在するのは「了」の外に「子³/子¹ tzŭ」「兒²/兒¹ urh~êrh~'rh」そして「看見」の「見⁴/見¹ chien」などである。

3.2. 『語言自邇集』(第2 版 1886)⁶

『語言自邇集』は初版では声調が表示されていないようであるが⁷、第2 版からローマ字の右肩に数字で示されるようになる。例えば「2,005」の発音は「êrh⁴ ch'ien¹ ling² wu³」と表記される。そして軽声は原則としてゼロ表記である⁸。「我們的」は「wo³-mên-ti」となる。ここに至って初めて軽声をゼロ表記とする方式が確立した訳であるが、細部に目を配れば、この方式が必ずしも徹底されていないことが分かる。文章の注音においては原則として軽声をゼロ表記としているが、各語の解説部分では『尋津録』と同様に「1」を用いて、「們¹ mên¹」「的¹ ti¹」としている。

また、軽声表示と本来の声調とが混在している例もあるが、『尋津録』よりは『語言自邇

⁵ 「了」については、動態助詞と文末助詞とで軽声化の偏りは見られない。また、軽声時の音形「liao」と「la」についても同様に分布の偏りは見られない。

⁶ 『語言自邇集』は初版 1867 年、第2 版 1886 年、そしてウェイド没後の 1903 年に第3 版が出た。初版と第2 版では内容が大きく異なる。第3 版は第2 版の簡約版である。ここでは六角 1993 所収の第2 版による。

⁷ 正規の初版本は未見。同内容と思われる『清語階梯語言自邇集』（1880 年頃に日本で刊行。六角 1993 所収）による。

⁸ 「們」についての解説（Part III の 8 頁）の末尾に「Note」として、“When the tone mark is omitted it must be understood that the character is so little emphasised as to carry no tone.” と記されている。

集』の方が軽声表示が安定している。例えば助詞「了」は、ほとんどの場合に軽声「liao」であり、「liao³」の例は稀である⁹。このほかに安定して軽声で表記されるのは「的」「們」「子」「麼」「着」などで、「裏」「頭」「個」には軽声表示は見られない。

4. 西欧宣教師のローマ字資料（17～19世紀）

4.1. グレモナ「告解捷法」¹⁰

声調を記したローマ字資料としてはトリゴー（Nicolas Trigault）の『西儒耳目資』（1626）が最も古いが、この資料は韻書の体裁によって個々の字音を記したものであるから、軽声の扱いを知ることはできない。文章の形で記されたローマ字資料としては、ヴァロ（Francisco Varo）の『官話文典』¹¹（1703刊）に収められたグレモナ（Basilio di Glemona）の「告解捷法」が知られている。声調は南京官話に基づく五声体系で、母音の上に声調記号を付して表す。記号は『西儒耳目資』と同様の方式で、陰平声が「一」、陽平声が「八」、上声が「\」、去声が「/」、入声が「V」である。

「告解捷法」の中には、軽声と見なしうる表示はない。ウェイドなどで軽声表示される語も全て本来の声調を示す記号が付されている。「了」「子」は上声、「的」は入声、「們」は陽平声、「麼」は上声¹²である。したがって、グレモナらの接した官話には軽声がなかったか、もしくは記すに足らずと判断されたことになる。

4.2. エドキンズ『官話文法』（1857）・『漢語口語階梯』（1862）¹³

ウェイドとほぼ同時期のエドキンズ（Joseph Edkins）は、官話（＝南京官話）と北京語の双方を記述しているため、彼の表記法によって、官話と北京語の状況を比較することが可能である。『官話文法』には主に官話の音形が、『漢語口語階梯』には官話と北京語の音形が声調記号を伴って記されている。声調記号はローマ字綴りの四隅に点を添える形式である。陰平声は左下に「,」を、陽平声は左下に「.」を、上声は左上に「'」を、去声は右上に「'」を添え、官話の入声は無点（綴りに-hを伴う）である。

エドキンズの表記では、官話にはグレモナと同様に原則として軽声はない。一方、北京語の表記には軽声があり、ウェイドと同様に陰平声として扱っている。そこでは「了」「子」「着」「們」「的」「麼」などが陰平声すなわち軽声として示される¹⁴。「麼」は官話の表記で

⁹ 「了」の軽声時の音形は「liao」のみであり、『尋津録』で見られた「la」は『語言自邇集』第2版では見えない。

¹⁰ 古屋 1991 による。なお、この資料の原名は、*Brevis Methodus Confessionis Instituendae*。古屋 1991 では、ヴァロが作成に関与した可能性も考慮して、“ヴァロ・グレモナの「聴解神父の例文集」”と呼ぶ。

¹¹ 古屋 1991 による訳名だが、現在ではかなり一般化している。原書名は、*Arte de la lengua Mandrina*。

¹² 「麼」は『西儒耳目資』でも（陽平声のほかに）上声に登録されている。

¹³ 『官話文法』は比較的通用している訳名であるが、原書名は、*Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*。一方、『漢語口語階梯』は中村の試訳で、原書名は、*Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language*。

¹⁴ 『漢語口語階梯』の末尾に「Appendix」として、北京語と南京語（＝南京官話）の声調に関する解説がある。そこには、北京語では「甚麼」や「我們」などの第2音節が本来の声調を失う（“the last [syllable] loses

はグレモナと同様に上声、北京語の表記ではウェイドと同様に陰平声（＝轻声）である。¹⁵

5. まとめ

崔世珍やエドキンズ、そしてウェイドの初期の声調表示では、轻声を他の声調から独立したものとして扱わずに、去声ないし陰平声と同一の表記にしている。これは轻声をどの声調の調値に近いと感じたかということを示すものであるが、同時に、本来の声調と轻声とを峻別することの難しさをも示している。実際の発話では、完全に轻声化する場合と、少しだけ弱化する場合などがあり、一定の表記法を確立するまでには相当の観察と体系化が必要になる。

崔世珍、エドキンズ、ウェイドのように、轻声が表記されているのは北方の資料のみである。そして、エドキンズの官話表記をグレモナの「告解捷法」の表記と照らし合わせてみれば、16世紀末以降西欧人が標準語と見なした明清の官話（南京の発音が標準とされた）では、轻声がなかったことはほぼ明らかである。換言すれば、轻声は北京を中心とする北方漢語において発達したのである。

このことは、北方に隣接するモンゴル語や満洲語が語頭に強勢を持つ言語であったことと無関係ではなかろう。モンゴル語や満洲語などの話者が漢語を獲得する過程で、その漢語にも語頭強勢の特徴が表れ、それに付随して、第2音節以下の音節、とりわけ接尾辞や助詞が弱化するという特徴が生じたものと推測できる。

「北京語」の辞典たることを目指した倉石 1963 が、轻声化のいくつかの段階を表記することに非常な注意を払ったことは、轻声表示の歴史を考慮する時、重要な意味をもつ。脆弱アクセントの発達こそが北京語らしさを形成した重要な一要素であり、ウェイド以前の西欧人が追いかけた「官話」という抽象的な共通語と一線を画する特徴であった。

本稿では、16世紀以来のいくつかの資料について轻声の表示法を検討したのであるが、その背後には、官話と北京語の対比、そして隣接言語の影響など、さらに掘り下げるべき大きな問題が横たわっている。

参考文献

- 遠藤光暁 1984 「《翻訳老乞大・朴通事》里的漢語声調」、『言語学論叢』13：162-182頁。
遠藤光暁 1990 『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』、東京：好文出版。
古屋昭弘 1991 「清代官話の一資料——ヴァロ・グレモナの「聴解神父の例文集」——」、『中国文学研究』17：18-37頁。
倉石武四郎 1963 『岩波中国語辞典』、東京：岩波書店。
中村雅之 2006 「翻訳老乞大・朴通事の轻声について」、『KOTONOHA』43：1-3頁。
六角恒廣 1993 『中国語教本類集成』第3集、東京：不二出版。

its proper tone”)として轻声についての明確な記述が見られるが、南京官話については轻声の記述はない。

¹⁵ 「麼」の状況は、「這麼」「怎麼」のような接尾辞の場合も、疑問を表す文末助詞の場合も同じである。